

環境と人間

森林・里山と人間

日時：平成26年8月2日（土） 13:00～15:00

講師：只木 良也（名古屋大学名誉教授）

概況



環境と人間 ～森林・里山と人間～
名古屋大学名誉教授 只木 良也

日本には「あとは野となれ山となれ」という言葉があります。この言葉は一般に「放置」することを意味しますが、これは日本の気候ならではの言葉です。日本は年間1700mm+aの量の多量の雨が降り、夏は暑いという条件があるため、野や山が形成されるのです。降水量分布と植生分布には相関関係があり、降水量が多くなるにつれて植生は砂漠から草原、サバンナ、森林へと変化しています。

日本の気候は、亜熱帯、暖温帯、冷温帯、亜寒帯、寒帯の5つに区分されます。森林帯はそれぞれ、亜熱帯は亜熱帯多雨林、暖温帯は照葉樹林（冬低温地域は暖温帯落葉樹林）、冷温帯は落葉広葉樹林（夏緑林）、亜寒帯は常緑針葉樹林、寒帯は低木林となっており、構成樹種もそれぞれ異なります。愛知県は暖温帯に属し、平地部～標高300、400mではシイ類やカシ類をはじめとした暖温帯照葉樹林が成立し、それ以上の標高地では中間温帯落葉樹林が成立します。また、愛知県は上流森林により木曾川水系からの水、木曾ヒノキなどの木材などを恵みとして受けています。

遷移には、溶岩の上などまったく植物質のないところから始まる「一次遷移」と、山火事や風倒のあとなどタネや根の切れ端など再生のための植物質を持つところで再出発する「二次遷移」があります。遷移が進行すると最終的に「極相」となりますが、

桜島での例をみると、地衣類やコケから始まり、タブ林になるまでに500～700年の年月を要しています。自然保護をするときには、遷移のことも考えなければなりません。

里山の必要性の理由づけとして、気候・防災・生物保全などの「効用機能論的」、生態圏として都市の不完全性を補完する「生態系論的」、宗教・風俗・習慣・思想・文化形成などの「文化論的」なものがあります。「里山」という字は田と土と山からできており、米作と森林との深いかかわりもみてとれます。これからの里山を考えた場合、里山ブームのなかで新しい時代の利用法を見つける必要があり、里山の存在価値についての「社会資本との位置づけ」や、都市内・近郊の里山の「都市施設としての位置づけ」が必要になってきます。